

## 木(ピョン)さんの話

ぼくは今四十五才だから、小学校に入ったのは何年前になるのかな。

小学校に入ったんやけども、その時分は、朝鮮人の生活はとっても苦しかった。今、石川県には約三、五〇〇人ほどの朝鮮人がいるんです。石川県の人口は今一〇〇万人ちよつとだと思えます。その中の三、五〇〇人ですから、少しだね。ぼくが住んでいる町会は、先生がさつき言っていたけど、二十八軒あるうちの二十六軒が朝鮮人、二軒だけが日本人という町会です。昔はね、まわりにも家はなくて、田んぼの真ん中にぼつんと二十六軒だけありました。だから、日本の人たちは、ぼくたちの町を見て、「朝鮮人部落(※1)」と言いました。そして、「朝鮮人部落、朝鮮人の子どもや」と言っただけでした。そういった所からぼくたちは小学校に通いました。

ぼくが小学校に入ったとき、金沢に住んでいた朝鮮人は、

ほとんど生活が苦しくて、食べる物もない時代でした。そういうときにぼくは生まれたのです。みんなのお父さんやお母さんも生活が苦しかったけど、朝鮮人はなお苦しかったのです。朝鮮人だということで働きに行くところがなかったのです。みんなのお父さんお母さんみたいに良いところへお勤めできる人は、まづいなかったのです。精一杯が土方(※2)、あとは、豚を飼ったり、鶏を飼ったりしました。みんなのお父さんやお母さんがあんまりしながらない仕事を、朝鮮人はしました。それが仕事として一番てつとり早かったのです。

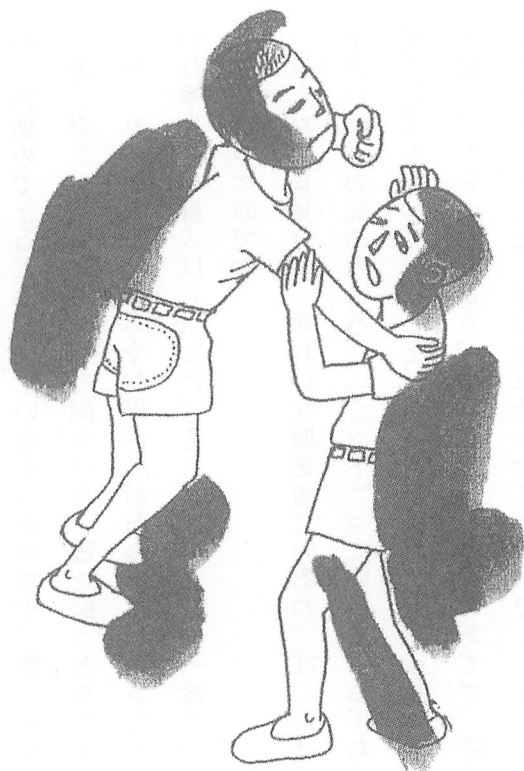
みんな今日見たら、きれいな服を着ているね。ぼくらは小さい頃、お尻のところ「ミット」って言って、つぎあてを買ってもらっていました。ズボンが破れても、新しいのを買ってもらえないから、破れた上からつぎをあてて、縫ってもらいました。君たちはそんなことないでしょう。服

が破れて「お父さん、買って」と言ったら、すぐ新しい服を買ってもらえるでしょう。ぼくたちのときは、服が破れたら、その上につきをあてて縫って、また破れたら、またその上から縫っていました。だから、ぼくの小さいときのあだ名は「ミット」でした。ズボンのお尻のところにもあて物をしていました。ぼくは、そういう貧しい生活をしていました。

学校に行くと「朝鮮人部落の子や」といじめられました。おかげで誰にも負けないことが一つあります。それはケンカです。みんなからバカにされると、結局することがないから、ケンカしきしませんでした。ケンカだけは勝てたんです。

でも、友だちの中にも良い友だちがいっぱいたんです。朝鮮人だとわかって、ちゃんとき合ってくれる子がいました。反対に朝鮮人だということで、バカにする子もいました。

ぼくの兄弟は五人です。弟が二人と妹が二人ですが、一人死んだので、今残っているのは弟二人と妹一人の四人で



す。ぼくが「朝鮮人や」と言われ、学校でいじめられたということは、ぼくの弟や妹たちも学校でいじめられたということになりました。あの時分、朝鮮人の子どもは、勉強のできる子もできない子も朝鮮人だということはいじめられました。

ぼくのまわりには朝鮮人でありながら、朝鮮人ということをして隠して生きている子がいっぱいいました。そういう子どもたちは、小学校のころは何も知らずに遊んでいます。

ところが、中学校や高校にいくと、朝鮮人であることがばれます。それで、朝鮮人であることがわかったときのショックが大きくて、その時点で勉強するのがいやになったり、荒れたりする子も多いのです。

それから、ぼくは結婚して、子どもができました。子どもは、女が四人と男が一人で五人です。一番下の子は今年中学一年生になります。そこで、まず考えたのは、自分が朝鮮人であることを知った上で育ってほしいということでした。君たちは障害者であるという差別、ぼくたちの子どもは朝鮮人だという差別、同じ差別を背負っていると、ぼくは思います。

今、君たちは中学生だから、あともう五、六年したら、高校を卒業して、いやでもひとり立ちしなければなりません。大きくなって、自分で生活していかなければならない時期がくるでしょう。そうなったとき、しっかりと気持ちを持つていけば、この差別の厳しい世の中を生きたいけると思います。だけど、君たちがしっかりした気持ちを持っていないと、挫折してしまうと思うのです。そう

いうことは君たちばかりでなく、ぼくたちの子どもにも言えることです。

これは、難しいことですが、子どもたちには差別に負けないで生きるということを一つずつ教えていこうと思っています。

(※1) 朝鮮人部落……かつて朝鮮人が集まって住んでいた地区を差別して呼んだ言葉。

(※2) 土方……土木工事に雇われる労働者。

# 卞（ピョン）さんの話（中学校向け）

## A 教材設定の意図

私たちは、差別されている側の人間を見ると、つい同情的に見てしまったり、何か手を差しのべなければならぬ存在としか見ていない場合がよくある。在日朝鮮人差別についても、朝鮮人を「差別されているかわいそうな人」と見がちである。しかし、在日朝鮮人は、差別に打ちひしがれて、日々悲観的に生きているわけではない。

小学校時代、卞さんは差別された怒りや悔しさをケンカという手段でしか表せなかった。しかし、いくらケンカが強くても、差別はなくならない。いくら勉強ができて、差別される。やはり差別ときちんと向き合う強さを持たなければ、差別はなくならないことを、卞さんは自分や兄弟たちへの差別の現実から学んでいく。

卞さんは厳しい差別を受けながらも、それと向き合い、たくましく生きてきた。そして、子どもたちにも、朝鮮人としての自覚を持ち、差別に負けないで生きていってほしいと、考えている。

そうした卞さんの生き方に触れることにより、厳しい差別の中を生きるといふことはどんなことか、差別と向き合い、差別に負けないで生きるといふのはどんなことか、生徒といっしょに考えたい。

また、この教材を通じて、生徒たちが自分の生活を振り返り、つらい状況に置かれている生徒が、自分を語り出し、励まされ

ればと思う。

## B 教材の解説

本教材は、在日朝鮮人の卞（ピョン）さんが、一九九〇年盲学校の生徒に話したものの一部である。盲学校では、生徒が身近な在日朝鮮人ときちんと付き合っていけるようにしたい、身近な在日朝鮮人の話を聞くことで、障害者として同じ被差別状況にある生徒たちの生き方と在日朝鮮人の生き方を重ねて、差別について考える機会をつくりたい、そう考えて、学校の近くに住む在日朝鮮人の卞さんに特設授業での話をお願いしたのである。

卞さんは少年時代、差別に対する怒りをケンカという手段でしか表わせなかった。しかし、それでは問題は解決しないことを学んだ卞さんは、PTAや町内会の活動などを積極的に担い、地域の中に入っていった。

卞さんは、授業の中で在日朝鮮人の差別状況と障害を持つ盲学校の生徒たちの状況を重ねながら、自分の生き方や子どもたちに対する願いを率直に生徒たちに訴えた。

生徒たちは授業後、次のような感想を寄せている。

将来、自分に子どもができて、わたしと同じ障害者だったら、卞さんと同じような教育をして、子どもに強い人間になってほしいです。わたしもそれまでに強い人間になれ

るように頑張りたいです。

差別されるのは私たち障害者だけでないということを知ってから、いつか差別がなくなると思っていた気持ちは、絶対差別をなくしようという気持ちに変わりました。そして最初の気持ちは人に頼っているところがあり、とてもはずかしくなりました。卜さんのお話は、わたしに新しい気持ちを持たせてくれました。その気持ちをいつまでも大切に、差別をなくしたいです。

感想文にもあるように、生徒たちは自分の生き方と重ね合わせながら、差別を自分の問題として、自分の有り様を問い直している。

### C 指導上の留意点

- ① クラスに在日朝鮮人の生徒がいる場合は事前に授業の内容を伝え、生徒の思いを十分聞き取っておきたい。
- ② 実際にクラスの中でつらい思いをしている生徒、特にいじめを受けている生徒がいれば、その生徒の思いを引き出し、クラス全体で考えていけるよう、授業の取り組みを展開してほしい。
- ③ 本文中の「朝鮮人部落」という言葉は朝鮮人が集まって住んでいる地区を指して、差別的に使われたので、指導に当たっては配慮をしてほしい。

- ④ また「土方」という言葉も蔑視的なニュアンスで使われることが多いので、この言葉も指導に当たって配慮をしてほしい。

### D 参考

- ・石川の人権教育第4集「出会いを求めて」（一九九一年 野田龍三・中村秀人編）
- 「自分を誇りに思う」岡崎美紀（石川県立盲学校：当時）

### E その他

- ・本教材では、国籍では在日韓国・朝鮮人と表記すべきところを、民族名の総称としての在日朝鮮人という表記を使った。

F 授業の展開例

教師の基本発問・助言	生徒の活動・指導の要領
<p>一 導入</p> <p>①人からいやなことを言われたり、人にいやなことを言ったりしたことはありませんか。</p> <p>二 展開</p> <p>②「下さんの話」を読みましよう。</p> <p>③下さんの子どものころ、どんな生活だったと話していますか。</p> <p>④「結局、することがないからケンカしませんでした。」という下さんの気持ちを考えてみましょう。</p> <p>⑤朝鮮人だということを隠して生きた方がいじめられないのに、下さんはどうして自分の子どもたちに朝鮮人であるということを</p>	<p>①一人ひとりに自分の体験を振り返らせる。</p> <p>②下さんが話をした場所や経緯について説明をしておく。在日朝鮮人の置かれている現状や、背景の分かりにくい部分など、必要があれば補足説明をする。</p> <p>③具体的にどんな差別を受けたか出し、そのときそのときの下さんの思いを考える。</p> <p>④自分たちのしんどさを分かってもらえず、差別をするまわりの子に対して、苛立ちと怒りをケンカでしか表せなかった下さんの気持ちを考える。</p> <p>⑤朝鮮人だということを隠して生きてきた子が、勉強が嫌になったり、荒れていったということをおさえる。朝鮮人だということを隠すの</p>

知った上で育ててほしいと考えたのですか。

⑥ 卞さんは、盲学校の生徒たちにどんなふう  
に生きていつてほしいと考えていますか。

### 三 まとめ

⑦ 卞さんのように自分の気持ちを分かっても  
らえずいらだったことはなかったか、また  
そのときどういう行動をとったか、書いて  
みましょう。

ではなく、自分の子どもには朝鮮人としての誇りを持ち、差別に負  
けずに生きてほしいという卞さんの願いに共感させたい。

⑥ 自分の子どもたちと同じように、盲学校の生徒たちも障害者差別に  
くじけることなく、強く生きていつてほしいと願う卞さんの思いを  
考える。

⑦ 卞さんの生き方を想い起こしながら、自分自身の生活を振り返らせ  
たい。そして、つらい状況に置かれている生徒が自分のことを綴つ  
たり、語つたりするきっかけとしたい。そうした生徒の文章は、今  
後の授業で採り上げ、クラスの課題としてみんなで話し合いたい。

### 本教材を使った授業から

◆ 朝鮮人の差別に関する文であったが、差別というものの現  
実を知ることができたようで、また、その生き方の理解まで  
はできたようです。(金沢)

◆ 在日朝鮮人の差別について、やっぱり自分もよく知らない  
なあと思った。大変な歴史があるんだと、生徒も思っていた  
ようだ。「かわいそう。本当はこんなふうには思っちゃいけない  
けれど、自分ならたえきれないと思う。差別しちゃいけない  
はずなのに、差別する日本人は許せないと思う気持ちになる  
でも、一人ひとりがしつかり、もっとちゃんと人権について

考えなきゃこの問題は解決しないと思う。ぜったいに差別な  
んてしてはいけない。でも、わたしも朝鮮人って聞いたら、  
ちよつといやなイメージを持っている。だから差別するんだ  
と思う。この気持ちをなくしたい。」(石川)

◆ 朝鮮人のおかれている立場を歴史的に理解している生徒が  
非常に少なく、補助教材の必要性を感じました。もっとも、  
これまでの私たちの積み重ねの不足をも露呈したとも思いま  
す。(鳳至輪島)